



~ 13  
4055  
14





門へ13  
號 4055  
卷 14



三十

仇討天貞東流繪實記卷之廿七



目録

一 錦繪盤割の事

兼 震之赤百捕る事

一 震之赤入牢の事

兼 狼九を書生の降云百捕る事



大正十八年  
本大學出版部



仇討天貞東洋繪巻實記卷之廿七

洋繪巻觸の事

并震之跡百補うす変

かゝるにてもれば所役人僅に震之跡を  
<sup>はら</sup>けり<sup>を</sup>八尾<sup>を</sup>休<sup>を</sup>息<sup>を</sup>させ人足大<sup>を</sup>勢<sup>を</sup>付  
<sup>を</sup>是<sup>を</sup>と<sup>を</sup>り<sup>を</sup>番<sup>を</sup>させ震之跡<sup>を</sup>地<sup>を</sup>至<sup>を</sup>并  
<sup>を</sup>各<sup>を</sup>所<sup>を</sup>役<sup>を</sup>人<sup>を</sup>同<sup>を</sup>及<sup>を</sup>して<sup>を</sup>も<sup>を</sup>所<sup>を</sup>在<sup>を</sup>形<sup>を</sup>不











その方并家来ハ花ノ西ノ入マツリ  
ウリキウソクヒズー山用ウカ  
よびおひ登ー自ガウー山稱受  
阿リルレバ第ニ世ニ阿リガミ仕合  
ナリト平伏ー花川ノ一モ也リ  
田村カ幸助并故瀆足丹その印の  
女(子)ノ一七少ニ希トモウノ内役而  
一七一おせーごん一くナカセ立所

一七五御中ニ申上ル一ル(ま)バ一カ  
親類と云トあり悦ビハ喜ツリス  
海又ハ第ニ世ハ花ノ家傑と云ん  
ト江戸カおひてハあ人が自ガミを  
稱一於鄙一ウんカミウノ川ナ  
尾カ尾ウ世ノ自ガミをカ一芝  
居カてもけ何ぶ討とね云ナカミ  
カ下ケ侍ガんをウリウリカミ



みかきふみ人かまごいを後みうつー  
ゆとりり高き愛みせーかけ節ちと  
しんをゆりおー屏風ぬきをのたご  
ひ多を大入やうーきーきりめその  
をきことりよーい女のもてあそ  
びののといありーありーうつてその  
せう京大坂いもちゆんを圓波海  
みーくーまそでゆづの綿繪と称ー

くらがそのき風のことりてをん兼此  
ゆるればあまこと高き買はらよの多  
ーゆりまゆ小條安房も殿ハ西の久保  
八幡赤服於孔亮とやーとまー  
とそよかー高き同公二十人宰執  
とりーせその夜ハすい震とみか  
宅ハはくことされればは命を借無町  
及人煙の通りを居て歌か玄笑の廣







先年より多洲の指番仕母より  
有りゆ妙母唯のわらぬ人私  
一雅系仕私をわらぬ一まじり  
心走し心もよひまじりか下り心  
とうわひ私うしうより不  
細舟ゆをわらぬし心何らぬあり  
有りゆ妙母唯のわらぬ人私  
よひゆをわらぬし心何らぬあり

ぬおるりゆと海ドールが安  
後すー心まじり心  
ハ是能る事るが心  
年心まじり心  
たがひしゆと海ドールが安  
有りゆ妙母唯のわらぬ人私  
心走し心もよひまじりか下り心  
心走し心もよひまじりか下り心  
心走し心もよひまじりか下り心



神祇絶てて常世を多て江戸申を  
河をましりくりの多うりらる申  
志賀仁左衛門 類比系も在東の家  
吉左衛門とてりて河申一あるもの  
河りらるが根を枯とをらちの場  
りては傷と仕か—又傷もあよび  
てあい 心腹のゆるゆるゆるゆる  
たよび 吟く 出候味のふ根九を枯

か積悪家らんあよびなればはよ  
くがうりんまたよびらるそドめの  
あどハ 後ぞりらるがせめのくご  
き、あやとりらん 雷治を枯かよ  
御人 素人あひそぎ人ごら—の義  
こ—白状もたよびらるゆる 佐々  
のりのあせんぎ、河りらるが徳を八助  
お流の権亮 豆ま香 在を枯生の降玄根















仕うけられ九を指大母しくりかき  
ちくーやうのいぢまひるるとい  
るう一あーぬきおせがかの根九を指  
とさびしを事あをりてそやうり  
られ九を指ハカとぬきおせーとさ  
かれまのいぢまひるるとい  
らぬバくんとせしむるあはか  
とささげえいとうり母しくいん

そぞまのいぢまひるるとい  
ぬりうりてされとこれるれ  
サきのをらとせーとこれあきん  
とさからゆりせぬあれ九を指うれ  
しーまびかりてあまのあ  
よりあをらとさけとせぬれ  
根ハそのまへ死しーとさ  
時別とれーうり夜とあけるん







有り一母の娘人の心づかみよらそ  
かゝる要歎とる心づげた身よ事け  
所の仕合ありソぞや家あくわこ  
何つてゆめはささこゆか福人あ人む  
アよ九を世と同居一家あめり持人  
ハもちらん村中一そる一これそ  
旅人大江よりこび九を世とこりて死  
き一又七日滞留させ仕別ざらふ

まで送りしあくあめのえげとわん  
ららあめあハハらとる根の九を世と  
ハ日名せしありとるやまここのび  
はる各境所あてめしとるま一生の  
浄土とる一信ハ元来芝の地申の  
信持るらうしくそ放蕩りのあて  
舟内よて女犯再食ハ勿論をめさく  
あまこことし一ららかその心あふ



まゝの雲といふ真の骨にていれそ肥前の  
園又島より塩めして来りたるを  
廿十月末にいりていせするがふり  
しつと伝人あづらうしきるのみたのみ  
煮焼して食しつらうが塩とちかひい  
つて厚の煉よりあつ一人これと考をせん  
せしは塩めはさし一羽めして海の有  
み用ひつらうはけ海云とせんの要候を  
傍よりあつはまの雲と考をせん一  
めらうひつらうがゆり付しとめしと  
あつとらうの大海してあつとらう  
は夜中より大なるをとり大熱のみ  
しとらうしとめれが卒内の傍候を  
みねとらうしとめれよりみねよりよとめし  
めきとらうしとめれそのあつとらうし  
とめしとらうしとめれとせだんをみとらうと

まゝの雲といふ真の骨にていれそ肥前の  
園又島より塩めして来りたるを  
廿十月末にいりていせするがふり  
しつと伝人あづらうしきるのみたのみ  
煮焼して食しつらうが塩とちかひい  
つて厚の煉よりあつ一人これと考をせん  
せしは塩めはさし一羽めして海の有  
み用ひつらうはけ海云とせんの要候を  
傍よりあつはまの雲と考をせん一  
めらうひつらうがゆり付しとめしと  
あつとらうの大海してあつとらう  
は夜中より大なるをとり大熱のみ  
しとらうしとめれが卒内の傍候を  
みねとらうしとめれよりみねよりよとめし  
めきとらうしとめれそのあつとらうし  
とめしとらうしとめれとせだんをみとらうと



つてききしこはさでぬ死るんとせし  
ゆし女國をばさうちりし各医をさ  
づひららぬそのころ各由にさし  
大海道三つとせとせとせとせ  
しられはあ山の役者へ送ひ今大海  
とるものこれに道三つとせとせ  
てさやとせとせとせのやうにせ  
うめひむす子めむひやされらる

けと人ハ大食傷ありあめとせられ  
てかくのどとせとせとせの食  
めよとせ配割ありその食に  
いふひとせとせとせとせとせ  
平愈るらんとせとせとせとせ  
し大母とせとせとせとせとせ  
かりりしとせとせとせとせとせ  
これとせとせとせとせとせとせ











うく生者の浄云と異名をせしを  
てましくめしむらうくや有りけん  
これハ生者の浄云わらぶ平生  
さけとこのむゆへ人己らみるぬ  
よひ浄云とあぶる能く有り  
生者よわらぶとせしめし  
を思へてなるまの浄云といふは  
此後不歎の放蕩なるお家ゆへ

身を追おされ夫婦ゆらとも思各  
み有りて何事とあさくしむく  
あるまのこころごとくせしめしゆへ  
今度めしむらうくは  
何ひて生者の面とさるしはひみ  
千代ゆれひて徹つのもづく先を  
あふりゆらくりしうばある人のもの  
ごもさるゑんやみれたるは







の場まのつゞきは命いのちをまゝに主しゅ境まがそのあう  
とわくまきとねむひたぐの目ま来りけ夜よ  
西にしの久保くぼめれぬてそのあうととと  
驚おどろうつこへおづふさふめて差さえけり  
しやとめたぐぬの如ごとく震ふるを秋あき平へい伏ふく  
して秋あき義ぎうつて常とこ列れつは百ひゃくと屋やら  
中ちゆうぬめて人としらうしゆ義ぎ一向いこう見え  
中ちゆうすゞはかのまじふ義ぎそれがしゆきえ

みてもこれけりゆやましハ人ひととがひ  
めてもあれあうととぞんてなうせ  
中ちゆうゆげられハ安やす之の房ふち殿どのは命いのちを捕とめ  
あうとせぬひその音ねとと義ぎのひて  
届とどく事ことゆへお遠とほハゆらぬとと  
しあがく震ふるを秋あき平へい伏ふくに  
の事ことあれハそのあうら何なんぞ様やうを  
る境まがととせらあやけりしゆたぐのあ



又伊弉諾を捕八荒これよりシ脱セ御ミを  
れバハはハとトぞゾちチてテ平ヒ依イ一ヒ一ヒ道ミチハ安ヤス房ボウ  
ちチ殿テン大ダイ方ホウハハたタせセらラるル事コトトトら  
是コトとトりリハハ脱セ御ミもモくク一ヒ一ヒてテ仇ウラ討チと  
稱セウ一ヒ一ヒてテはハけケぬヌらラ事コトトトらラるル事コト  
あアらラるル人ヒト命イノチトト絶ツク事コトハハ死シてテ生ナじジ  
まマるル事コトハハ天アメノ命イノチトトたタはハすス事コトトトらラるル  
一ヒ一ヒとトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コト

四シ仕シ事コトハハ作アセつツけケらラるル事コトトトらラるル事コト  
双フタ方ホウトトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コト  
糸イト一ヒ一ヒとトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コト  
云クニとトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コト  
まマるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コト  
日ヒのノ事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コトトトらラるル事コト

仇討天貞東海繪實記卷之七



和 漢

# 諸軍談

放牛舎 桃林

二代目

田辺 南砲

伊東

花清

一 政談 齋之の籠

立 文車

無

柴 正 田 彦

南玉

定席

南彦の孫 隆 仁

仇討 天貞東 綿繪 實記 卷之八

## 目録

一 服部 震之次 氏對 交の事

并 穿肉 少 抄 口 之 交



仇討天真東洋繪實託卷之八

報効震く赤坂の對交の事

兼 宰内あつて携台の事

同三月廿一日花川庄町江前番番び  
山崎次郎とて喰あされらる江前番番の  
田むらや幸助とトあり友を連とらぬ  
かくりりらるハ我去らセりゆよひる



のそりうへ白洲しろすもねりて小次郎せじらうが  
度別どべつもそ人ひととこそきりあかては  
と陳ちんトトらうの安房あふも柳やなぎ我われ未  
みうさひの川がわでたしうらう徳とくおやう  
とつたづひのあふ返へん事ことみお携たづめん  
とねづらむやとあひひしがゆり上うへと  
かろんど自由じゆうのねづひと世よ又  
さしひうへ川がわにせり明日あしたのたまたまふ

むと陳ちんむらもねひては是ぜ派はいお携たづ問  
をねづひ余あまハ天てんままままままああぞん各かく  
がみもろひてさやうめあはしり  
り親おやねづらむの時ときは何なにの事ことも  
みもろひてあふ末すえの親おやとときり  
りままととカカ希きああるる死しせせババ飲の  
あははとてこれどももろるろる下したの山やま  
きふも親おや何なにのの見みも何なにと



すば又尋たあつのちり人のるごとかり  
とてバハあがるんぞ増えしとて物か  
けうらとととととととととととととととと  
つらざひおととととととととととととととと  
りハ印みしひそくはとととととととととと  
一紙と月て令衆のい〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
何れぞれ古今のこゝろとととととととととと  
ととととととととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと

いふぬりゆく事とととととととととととととと  
何れぞれゆ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
とととととととととととととととととととと  
〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜  
貞享元年三月五日漢字花川戸  
江戸の事とととととととととととととととと  
雲居の事とととととととととととととととと  
とととととととととととととととととととと



履出づれのみは帝を指し向ひの  
そまらう多年伯父の仇とてけりへも  
うらうらうと尋ねておの右倉光光年  
とやうとて尋ねておの多子震を  
笑るまきけりやうとて尋ねて何  
ぞ性なるを性候もてやとて  
づのそのは帝を指し平伏して先氏  
とて候の義は尋ねて何とてとされ

坊をれそれ候くりる山返言上  
いゆまも物も伯父候とてとて  
まきしとて笑へ中さびとて上り候  
義めり座にあり物も義とて今  
入牢れを付られお候のん候  
ひまもいゆとてたのひ入とて  
て中候げられ安座候とて候  
とせのひを尋ねて一云神妙なり











あつりてつりあげたては  
事せんうきと懐りうらむん  
トせりゆとわさましるまゆのうへ  
上りれが根九まゆこれときひてい  
は具るうら平馬うねり細年より  
の悪事はゆりかくし仕まひい  
てのかくご人の不告とり口ま何  
うせんはさでみるうらが悪事ハそれ  
うら四節まゆかりト一事業をま  
一あましむも三々年ひまのま  
るんだとたづぬる事一これさ  
ありたましむ四節まゆか  
作居あてせて益る一そのあま  
うちとせせしめいぬるん  
とれと四節まゆたづぬるま  
ん後又うらんとひまきりし  
まゆ







うらそと安<sup>ちやう</sup>居<sup>の</sup>ち殿<sup>どの</sup>おのきらと人<sup>しやう</sup>争<sup>しやう</sup>  
論<sup>ろん</sup>前<sup>ぜん</sup>人<sup>じん</sup>みみく何<sup>なに</sup>りごもれくの山<sup>さん</sup>夢<sup>む</sup>  
みそりわう<sup>みそりわう</sup> 突<sup>つ</sup>口<sup>くち</sup>ー<sup>ー</sup>多<sup>た</sup>り<sup>り</sup>らる<sup>らる</sup>安<sup>ちやう</sup>居<sup>の</sup>ち<sup>どの</sup>  
反<sup>たがひ</sup>の震<sup>しん</sup>長<sup>ちやう</sup>と<sup>と</sup>然<sup>ぜん</sup>か<sup>か</sup>何<sup>なに</sup>りさ<sup>さ</sup>白<sup>はく</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>れ<sup>れ</sup>  
る<sup>る</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>の<sup>の</sup>由<sup>ゆ</sup>井<sup>い</sup>西<sup>せい</sup>雪<sup>せつ</sup>丸<sup>まる</sup>橋<sup>はし</sup>よりたぐ  
ひの<sup>ひの</sup>く<sup>く</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>の<sup>の</sup>り<sup>り</sup>ー<sup>ー</sup>と<sup>と</sup>あ<sup>あ</sup>何<sup>なに</sup>ー<sup>ー</sup>免<sup>めん</sup>ー<sup>ー</sup>  
震<sup>しん</sup>長<sup>ちやう</sup>と<sup>と</sup>然<sup>ぜん</sup>か<sup>か</sup>あ<sup>あ</sup>る<sup>る</sup>せ<sup>せ</sup>の<sup>の</sup>ひ<sup>ひ</sup>る<sup>る</sup>ん<sup>ん</sup>ど<sup>ど</sup>昔<sup>むかし</sup>力<sup>ちから</sup>  
と<sup>と</sup>争<sup>しやう</sup>ー<sup>ー</sup>ら<sup>ら</sup>る<sup>る</sup>ら<sup>ら</sup>ま<sup>ま</sup>し<sup>し</sup>ら<sup>ら</sup>り<sup>り</sup>の<sup>の</sup>ち<sup>ち</sup>は<sup>は</sup>

トまづ<sup>とまづ</sup>今<sup>いま</sup>日<sup>ひ</sup>ハ<sup>ハ</sup>れ<sup>れ</sup>も<sup>も</sup>及<sup>およ</sup>び<sup>び</sup>ら<sup>ら</sup>を<sup>を</sup>  
か<sup>か</sup>ま<sup>ま</sup>の<sup>の</sup>て<sup>て</sup>ぎ<sup>ぎ</sup>ん<sup>ん</sup>こ<sup>こ</sup>の<sup>の</sup>ま<sup>ま</sup>を<sup>を</sup>ぐ<sup>ぐ</sup>ー<sup>ー</sup>そ<sup>そ</sup>の<sup>の</sup>  
もの<sup>もの</sup>ご<sup>ご</sup>も<sup>も</sup>穿<sup>くわん</sup>心<sup>しん</sup>ハ<sup>ハ</sup>け<sup>け</sup>と<sup>と</sup>余<sup>あま</sup>何<sup>なに</sup>り<sup>り</sup>な<sup>な</sup>れ  
ハ<sup>ハ</sup>徹<sup>てつ</sup>率<sup>そつ</sup>云<sup>い</sup>や<sup>や</sup>り<sup>り</sup>各<sup>かく</sup>々<sup>々</sup>穿<sup>くわん</sup>心<sup>しん</sup>ハ<sup>ハ</sup>つ<sup>つ</sup>進<sup>しん</sup>  
行<sup>ゆ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>は<sup>は</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>ハ<sup>ハ</sup>安<sup>ちやう</sup>居<sup>の</sup>ち<sup>どの</sup>殿<sup>どの</sup>大<sup>だい</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>の</sup>み  
少<sup>す</sup>の<sup>の</sup>希<sup>き</sup>は<sup>は</sup>と<sup>と</sup>れ<sup>れ</sup>あ<sup>あ</sup>せ<sup>せ</sup>な<sup>な</sup>れ<sup>れ</sup>ハ<sup>ハ</sup>お<sup>お</sup>の<sup>の</sup>こ<sup>こ</sup>す  
と<sup>と</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ<sup>ぬ</sup>震<sup>しん</sup>長<sup>ちやう</sup>と<sup>と</sup>然<sup>ぜん</sup>か<sup>か</sup>を<sup>を</sup>つ<sup>つ</sup>と<sup>と</sup>争<sup>しやう</sup>入<sup>い</sup>て<sup>て</sup>ま<sup>ま</sup>ら<sup>ら</sup>ぬ  
り<sup>り</sup>ら<sup>ら</sup>進<sup>しん</sup>ハ<sup>ハ</sup>安<sup>ちやう</sup>居<sup>の</sup>ち<sup>どの</sup>殿<sup>どの</sup>大<sup>だい</sup>者<sup>しや</sup>の<sup>の</sup>み<sup>み</sup>山<sup>さん</sup>江<sup>かう</sup>希<sup>き</sup>



はらへ震長と衆と面あり母のまはるを  
あのみし石田の徳のありき松羅の人  
畜うるふか初名倉光山は帝といひ  
しとて帝を指さく母とよこりらるる  
ふあかあまらあ人を面とぶく何  
ぞやいふこれ新と山は帝といふび  
らうとらつと蒼へらうあてたのま  
らう事百端いりりらる事況あ

ありとささるが天下の目代とあり  
あよ安房の殿の出城智とる人  
れうやまいれ震長と衆はかいらを  
さげらるるのこもをとおさるればあを  
より命がきり母海をでーこれハ  
天の目代とありては彼衆とつや  
あらるる白杖とせでたぐきらたの  
まも侍の子らるるま比真とれん



のちふとあがり命をたしこの  
世も多とたてんとははるや軍内  
あけとれあせられ三人のよ一因  
み傳る所さして河まゆく安んち  
及ハ河とみ流り一は糸を掛みあそ  
せのひおが移がひの印もく味しう  
しるわれがまきか白杖の節はま  
ふあをよびあまへ一室の西へあがり

ぶきい一たあせりこれがある人ハ  
平らく一花川産さして降りたり  
そのち雲と赤い軍内あつて口  
のせああゆよとくも一とどこの  
とどくもいづれをまよのこるなり  
これがかくして日教かきる一白杖  
あれたらむざりこれがこの統安層の  
殿つー百されは同没石各長心殿















かくろづー一何れか一ひるるらんド大  
あま入るるた母一ぬともつて忠臣  
孝子とよむれらるる代々名を  
のこせしきめと内目とるるました  
ぬひらましハしきとゆけらせめてこの  
のども震るる言かけ一言とゆきより  
もあぞろくもろよめたよびるるを  
震るる大夢何げあめくあ何と

ゆるりしたるあぞ天下の改事ハ  
かくるるれ事ありて一朝一夕の  
こもあめづい安房守殿のたふ  
せらるるを何とまきたるよぞそや  
ととらてこいひらるるあぞせめてのもの  
とよけ一云みそげまされ震るる  
ととらてこいひらるるあぞせめてのもの  
あけりるるきりきりるる秋の湯玉







一滴と糸が末期の水とありひこ海よ  
く呑んで白伏し一山仕動とまるど  
と三づらう白剛へありあちうま  
震るがが母くまをこりなれば震るが  
ハ完糸とくちあひとささうし  
げあえなほしりささうとにさし  
おして呑たり傳へまきくさふつ  
丸橋よりされし伊豆の夜はあけ

今日安房の夜はあけ  
糸のうへるれば格あし義あめ  
んざのささうとくちあひとささう  
るをし大音あげこれ指ハエのその  
あし一羽列の象浮めて人とあめ  
しうり常陸の山は百りありて  
あふりあつとささうけ推しあめ  
は人の海城とささうしあふりあつ



増長してまゝの物之繩自母あひて  
商人の念子をりてひ雷次を世と  
しめはらりし廣尾をりて遊こまき  
夜登人ごぼり敷るきりしゆハ  
びかくのいづくの身もあはれを  
りりさぬハ天のまらりしむらあま  
しとつてくやあまならざれ  
ごよなごうらむらくハ伯父ハちあつか

幼年の福がひニツカハ今一度あ親  
ゆれそのうへりてこ海よくは命をま  
み付きてくまんのものとあひてあが  
ひも水のりここれより卯中とあは  
事なすれごころに仕立とたぬ日  
るべしあめびあくせぬそのあま  
さる古氏まれらるちあまといはれ  
とるあまのくも威候といふ







りおきせむきよしめて町内を引取り  
し日しあか回公元その外は若登  
織り何ふしあいのり先手既お人し難  
一まびししちがしおはしむきよし  
たせよししされらるあし江戸ハ中  
あよむびを互はでもあぬれこれ  
かよあ役人かこせしんぎん  
ありししあしあまの年震の事

倉光少江舟とひし以常列より  
江戸へおまの町は物うぐるこ  
おひてきぬ商人の合子とうをひ  
し事白杖ししあし山の統ハ  
て水戸の役人ししあ所を引へ  
しこれ何れあしあし城下市所ニ  
丁目角屋又まはりよびあし  
お代格あしししあしあし



よーめて震の来りつきの合せは  
こゝれもいふとんむ九を指  
河りうをれざるも一日くせん  
ぎかさるりらあまその来あ  
かして甲州のぶ山へさん  
一たるこのうー隆起を指が  
てよーまこーいふーんれはさう  
くめーさうあんーまーめて

町内を新内役人ふか三人目公  
元二十人夜と目まつぬで甲州の  
娘山へ隆起を指あともーて真  
享元年甲子又月廿七日の朝と下  
二千八人めて甲列さーてぞんそ  
かれりり

仇討天貞東海繪實記卷之八終



